初期小石川後楽園における眺望行為に関する研究

A Research on an Act of Viewing in Koishikawa Koraku-en Garden's Early Days

李 偉*

Wei LI

Abstract : Former studies on Koishigawa Koraku-en garden have traced its historical transformation and have obtained good outcomes in investigating its design, and the arrangement and characteristic of its parts. However, these researches have been concentrated on the internal landscape of the garden and the examination of the idea aspect that it bears. The location of Koraku-en and the scenery viewing from the garden have rarely been discussed. Whether or not there is viewing scenery is not only a matter that concerns the appreciations of the garden but also exerts influences on the usage of the garden and the owner's view towards the garden. Without the elucidation of this issue, I suppose that on no account we could properly evaluate the structure and design of Koraku-en. Based on documentary records, especially historical sources written in Chinese, this study examines the location of Koraku-en and discusses whether or not there were acts of viewing towards the outside of the garden and intentional uses of borrowed scenery (Shakkei) in Koraku-en's early days.

Keywords: *Koishikawa Koraku-en Garden, an act of viewing, Borrowed Scenery (Shakkei)*

キーワード: 小石川後楽園, 眺望行為, 借景

1. 研究の目的と対象

小石川後楽園は江戸初期に成立した典型的な回遊式庭園である。大泉水を中心にして、大堰川、白糸滝など日本の名所をモチーフとしたデザインや、西湖堤や円月橋など中国趣味のデザインを園内各所に取入れ、それまでの日本庭園の構成要素を集大成した庭園といえよう。江戸初期の大名庭園の一つとして著名であり、他の大名庭園に多大の影響を及ぼした。

従来の後楽園研究は、同園の歴史の変遷をたどり、意匠や局所の配置・特徴などの究明に成果をあげた¹⁾。しかし、それらは庭園内部の景観と、それがもつ思想的側面の検討に集中し、後楽園の立地や庭園からの眺望景観は、ほとんど重要視されてこなかった。そこから導かれた後楽園像はかなり閉鎖的なものであった。本研究は、後楽園の眺望景観に焦点を絞り初期史料の分析にもとづき、再検討を試みるものである。

庭園と眺望との関係について、本中はのちの借景にいたる前の段階を「眺望行為」として詳しく分析し²⁾、また、飛田は借景について論じ、「厳密な定義はむずかしい」³⁾としながら、借景を「庭園の構成要素との関係が意識されている背景」⁴⁾と定義した。本研究は、こうした先行研究をふまえ、借景とは「庭園外の景観を、たんなる背景ではなく、その庭園の重要な構成要素として利用する行為、またその手法を指す」と考えるが、この借景に先行する眺望行為を、庭園外の景観を無意識に眺める「たんなる眺望行為」と、庭園外の景観を意識的に評価する「意識的な眺望行為」に分けて論述を進めるものである。

元禄と享保年間の後楽園をめぐる一連の大改造の記録以降、後楽園の眺望景観が記されるようになったと従来考えられてきた⁵⁾。それも眺望を重要視する意味ではなく、大改造から導かれた悪影響として認識された。眺望景観の有無は庭園の鑑賞法にかかわる問題だけではなく、庭園の利用法、また持ち主の庭園観にも影響を及ぼしたところであり、これを補ってみなくては後楽園の地割や意匠は決して正当に評価できないであろう。眺望景観の検討は、江戸時代の庭園像を掴むもう一つの重要な鍵だと考えている。

本研究は文献史料、特に漢文史料をもとに初期後楽園の立地を

含めた変遷を考察し、園外の眺望行為があったかどうか、そしてそれは厳密な意味で借景となりえたかどうかを検討するものである。

2. 史料分析

小石川後楽園は寛永6年(1629)、二代将軍徳川秀忠が水戸徳川家の初代藩主頼房に76,699歩(約253,074㎡)に及ぶ大規模な敷地を宅地として与えたことにはじまる⁶⁾。後楽園の立地に関して『水戸紀年』(1828)は小石川邸地の前身について記している⁷⁾。ここはもと本妙寺と吉祥寺の境内であったが、両寺院は他所に移転されてその跡地が水戸藩に与えられた。寺院の移動も惜まず、望ましい地所が確保された上で、大規模な造園活動が行われた。「元来地勢幽邃にして、喬木鬱密なり」と記録されていることから、後楽園の雰囲気に関して従来の研究のほとんどはこの記述に影響され、園内の「深山幽谷」、「市中の山林」の意境だけが強調されてきた⁸⁾。

『水戸紀年』は後楽園成立から200年あまりを経てから編集されたもので、時代状況と政治状況を背負った記述がなされていると考えられ、簡単に信用できるかどうかは疑問である。確かに寺院の跡地に作られたことは事実で、鬱蒼とした大木は造園の際、そのまま利用されて残ったのかもしれない。だが、初期後楽園の景観の検討は、園内の景観だけで充分であろうか。

初期後楽園についてその当時記された文献である林道春の「小廬山記」には眺望景観の記述があらわれる⁹⁾。

「小廬山記」は寛永17年(1640)3月、頼房が林羅山を庭園に召し、庭園の築山に命名せしめた記録である。羅山は小廬山と名づけ、小廬山の三字を書き、「小廬山記」を残した。中国の名勝地廬山を意識しながら、また中国の古典『神仙伝』や『莊子』、『論語』を自由に駆使し、目の前のすばらしい庭景と水戸侯の仁徳を称えた文章になっている。林羅山は江戸初期の幕府の儒官として知られ、漢詩文の素養が高かった。文章は古典を多用しており、また大胆な文学的修飾も加えている。そのため、小廬山から実際どれほど園外の景観を見渡せたかは確定しがたいが、こ

*総合研究大学院大学文化科学研究科

重要なのは、眺望を感じさせる記述の存在である。小廬山に登れば「千里海山の佳景」、すなわち周囲の景観の広がりを見渡せたとの表現は誇張を伴うことを割り引いて考える必要がある。しかし、「千里海山」といった遠望を意識した表現、「佳景」という景観のすばらしさを意図した表現があることから、光圀時代に小廬山からの遠望が、それなりの絶景として認められていたと考えたい。

「小廬山記」から22年、二代光圀の命により国史編纂の事業に携わった林羅山の三男林鷺峯が園遊の記録を残している。それは寛文2年(1662)10月より、同12年(1672)12月に至る10年間で、鷺峯が日々の記録として書き続けた『国史館日録』に見いだせる。国史館における修史事業関係の記事を中心に記載されたものだが、そのほか、史館の庭園で酒を飲み、詩会を開き、花見をするなど当時の文人たちの交遊、君主水戸光圀などとの接触、政治、学問に関する論議などの記録も見られる。『国史館日録』の中には、後楽園について書かれた箇所が三箇所ある。

最初の記録は寛文5年(1665)6月17日の記述である¹⁰⁾。その日、鷺峯は光圀に召されて、息子と門人とともに水戸邸を訪れた。光圀はたいへん喜んで、鷺峯たちを誘って園中を逍遥した。「周回寛広、池有り林有り、池上に長橋を架し、橋下に舟有り、喬木茂草千萬草なり」¹¹⁾と鷺峯は記す。「細徑を挙がりて山に上る。山に二堂有り、其の一は夷齊堂と号して半腹に在り、其の一は絶頂に在りて至徳堂と号し、泰伯を祭りて云云、」と続く。夷齊堂と至徳堂は後世の得仁堂と考えてよい¹²⁾。当時光圀は伯夷・叔斉の高徳を慕ってこの堂を建てたのである。得仁堂は小廬山のすぐ近くの山に位置しているとの説もあるが¹³⁾、上掲の文章から見れば、細い道をたどって上った山を小廬山と称していると思われる。

ここで重要なのはつづけて「其の余の境致は暫く置きて言わず、遠望絶景勝て計ふべからず」¹⁴⁾と述べているところである。遠望の絶景は他の境致から突出した存在として取り扱われているのである。築山に上り、園中の美景はもちろん楽しんだであろうが、特に遠望の絶景を強調したことは重要である。光圀時代から、すでに小廬山から見た園外の遠望景観を称えるようになっている。またこの文章から、光圀が常に後楽園に儒者たちを招いて、史書の編修などの相談のほか、園遊させ、詩も作らせるなど、一大趣味人としての姿も見せたことがうかがえる。

また、寛文8年(1668)4月8日の条¹⁵⁾と寛文9年(1669)5月16日の条にも後楽園の記述がある¹⁶⁾。この二つはほぼ同じルートでの園遊であり、水戸邸へ儒者を招待し、饗宴のあと園遊させ、詩宴の会を催したもので、当時の庭園の雰囲気がいまわられる記録である。

「園中山あり、池あり、船あり、橋あり、嘉木奇巖備わらざるなし。徑路は迢迢として村野の如く、その間に清水長流し、巖瀑は迸出し、水車は水を挽いて回転する」、と当時の後楽園の光景が描写されている。

水戸侯は自ら先導して小廬山に登った。この時期の小廬山の姿について「山下に閣有り、其間に巉巖有り、其路細くして斜長なり」すなわち山の下に閣があり、その間に高く険しく聳え立つ岩山があり、その道は細くして斜めに長いと記されている。光圀自ら先導して、儒者たちと一緒に小廬山に登っていることから、この時代の小廬山の景色にかなり自信をもっていたことが想像できる。この時代、小廬山に登ることが園遊のメインルートに含まれていたことは疑いの余地がないであろう。園遊のあと、皆に詩を求め、歌を詠みあうことも光圀の園遊会の慣例になったことがうかがえる。

「小廬山記」は頼房時代の後楽園の記録であり、この時代において小廬山の上から見る眺望景観が賞賛され、その記録がすでに

林羅山によって残されたことがわかる。羅山の三男の林鷺峯の『国史館日録』のなかに書かれた光圀時代の後楽園鑑賞記に至っては、毎回小廬山に登り、眺望するのが慣例になって、後楽園見学のメインルートになったことが推測できる。

次にほぼ同時代に書かれた『遊後楽園賦并序』(1669)をみてみよう。

「斯園殆ど天下に於いて甲なるかな」¹⁷⁾つまり後楽園の景観が天下無双の美景だと絶賛されている。筆者朱舜水是明の遺民で日本に亡命し、儒者としてすでに碩学の譽が高かったが、更に多芸多能の実家として優秀な技能を有していた。寛文5年光圀は朱舜水を江戸に招致し、自ら弟子の礼を執って厚遇した。その報恩として、朱舜水は水戸藩の種々の土木建築事業に参画して妙技を振るった。この後楽園記は、主君に対する感謝の気持ちにあふれている。「遊後楽園賦并序」は光圀時代の後楽園を理解するため重要な文献である。

光圀は饗宴の前にまず儒者たちを園遊させた。朱舜水は自ら山道を登り、橋を渡って、閣に入った。そこで「重霄響答し、千門を下瞰す」¹⁸⁾すなわち景色はここで豁然と開けた。「重霄」は広い空のことで、「千門」は「多くの家。千家」の意味である¹⁹⁾。おそらく広々とした空を仰いで、街中の民家を俯瞰したのだろう。天と地はここで一体になり、遠望の絶景はこの上ないと、朱舜水は絶賛したのであった。

この文章はまた光圀主催の饗宴において、余興の舟遊が行われた模様も描いている²⁰⁾。

舟子は船を橋畔に繋ぎ、朱舜水らの脇を支えて舟に乗せた。朱舜水は「丹丘」(『楚辞』にいう仙人の住む丘)に目を凝らし、池を三周したところで二編の詩を作った。二編目で「天は高い山を作ったが、実は人の力によって模倣することができる」と詠っている。これはつまり築山のことである。舟は橋の傍から漕ぎ出した。この橋は「長橋」のことを指している。光圀はよく儒者たちを集め、宴会を催した。自慢の庭園を鑑賞させるのも藩主のもてなしの一環になる。歩くだけではなく、舟を出して、大泉水を周遊し、酒を飲みながら、景色を鑑賞し叙情の詩を作るのは園遊の楽しみかたであろう。舟から見えたのは「丹丘」、²¹⁾「疊巘」であった。「疊巘」という言葉は「かさなった山」と解釈できる²¹⁾。「遙指」であるから離れたところの山を指している。したがって、つぎつぎに重なる山なみを遥かに眺めたと解釈できる。

後楽園の景況を描いたもっとも古い図面に「水戸様江戸御屋敷御庭之図」(図1)がある。絵図の成立年代は定かではないが、吉永義信は宝永年間(1704-11)よりやや遡るとしている²²⁾。絵図に「ホクロク堂」と称する建築物が松原近くに存在する。「ホクロク堂」は福祿堂であって、元禄16年(1703)の大地震で崩壊し、その後再建されなかったものであるから、絵図は少なくとも元禄16年を下らないものと考えられる。宝永焼失までの後楽園は安定した時期であり、光圀によって完成された後、大きな変化がなかったことが想像できる。徳川綱條(三代)は元禄3年(1690)光圀の退隠により襲封し享保3年(1718)に薨去した。この図はその間の状態を描いた鳥瞰図風の絵図であって、後楽園を図化した最初の資料といえる。測量術とその表現法がまだ未完成的な時代の図面であるから、現代的な意味での「正確さ」には欠けるが、当時の後楽園の地割と各局部の位置とを概略で明示するきわめて重要な資料であることは疑いえない。後楽園に関するこの時代の他の文献と比較対照する価値がある。

この中で「長橋」と記された木橋は、大泉水の中央を南北に横断していた。橋には西方に長方形の棧が張り出しており、いわゆる雁齒橋である。橋台に巨大な根府川石が用いられていた。橋の近くに中島がある。中島には老樹、大石があり、社が祀られてあった。長橋は大泉水を横断していて、舟がくぐれる部分も設けられ

ていたらしい。光圀は邸内にあった史館（彰考館、『大日本史』の編纂所）の儒者たちをここに集め、月見の詩宴を張ることもあり、ここから眺めた庭園の風景は絶勝であったという²³⁾。「水戸様江戸御屋敷御庭之図」から見ると橋の西側、橋台の真正面から小廬山が見られる。清水堂が立つ山も見られ、朱舜水の詩の中の「壘巖」は小廬山を含む山と解したい。（図2）

また最北部に庭園の背景をなすと思われる一連の山「見越山」が描かれている。「見越山」と庭園との間に切通しと「長屋」がある。江戸初期の後樂園では、大泉水から望む見越山は庭園の背景をなしていたと考えられる²⁴⁾。

この時代の見越山を後樂園に従属する別園とみたのは田村剛氏だが²⁵⁾、これは園遊にとって大事な景であり、単に別園といって済ませることはできないであろう。寛政期には橋がなかった時期もあったようだが、見越山の地域は後樂園の大事な眺望景であったと見ておくのが良さそうだ。というのも、ほとんどいつの時代にも園の西北にあたる見越山の地域は切通しにより区別され、橋によって連絡されていた²⁶⁾。（図3）

光圀の時代、長橋から舟を出し、大泉水から小廬山や見越山を眺めることができたに相違ない、またそれらを鑑賞するのは園遊の欠かせないルートだったであろう。

当日の宴会のメンバーのもう一人、儒者である人見傳も後樂園の様子を「春遊小石川邸後樂園記」に記した。園外の眺望景観は人見傳の眼前にあるかのごとく展開した²⁷⁾。

人見傳は林鷺峯に学んで、光圀に重用され、寛文8年（1668）から史書編纂の大任を任された人物である。この日の来遊者が舟遊を行い、園遊のあと彼らに膳（食事）が供されたのは「遊後樂園賦并序」の記述と同様だが、眺望景観について人見傳は朱舜水より詳しく記述している。引用（注26参照）の下線部「西に望めば、町の賑わいが目に入り、往来も頻繁であり、南に上げば、立派な江戸城を拝見でき、城の雉（たかがき）堞（ひめがき）は高

図-2 小廬山付近（北を上にして掲載）

図-3 見越山付近（北を上にして掲載）

図-1 「水戸様江戸御屋敷御庭之図」

くて険しい」というように、雄大な庭園感覚が表現されている。当時の後樂園の絶景の中、園内の景観だけではなく、庭園外部の城などの雄大な景観はもちろん、町の中の賑わいも目を楽しませる賞賛の対象として認識されているのである。

次に元禄年間の重要な文献として、辻雪洞の『東都紀行』があげられる²⁸⁾。

辻雪洞は『大日本史』の中心となる編集者として有名な知識人である。彼が書いている『東都紀行』は江戸の案内書として諸大名の邸宅、名勝旧跡を細かく記録している。後樂園に関する記録は元禄5年（1692）に見学したときの遊園記である。ここで注目すべきは、「富士のねを松の葉ごしに見渡せば、三保の浦浪おもかげにたつ」富士の峯を松の葉を通して見渡せば、三保の浦の浪が眼前に浮かぶという歌が詠まれたことである。松の葉を通して、遠く富士山を見たとの記述は眺望を考えたときたいへん重要である。光圀もこの遠望の富士山は自分の庭の一つの絶景として、非

常に誇りをもったという。松の葉ごしに富士山が存分に見え、遮るものは一つもないほど、すばらしい景色だと絶賛している。当時、晴れた日に、町中でも普通に見られた富士山は松の葉を通して一層きれいに見えたことであろう。富士山の見えた場所は同じ文献に、「清水の堂立たる山」と記された小廬山であろう。このように後楽園はたんに園内の景を愛でるだけでなく、周囲の景や遠望も楽しむ庭園だったのである。

3. 結論と展望

初期小石川後楽園の景観を復元するための絵図、文献史料は極めて少ない。そこで従来あまり利用されなかった儒者たちによる漢文史料に注目し、その解説によって初期の景観復元を試みようとした。本稿では、これらの史料の分析を通じ、初期後楽園の景観を全体として理解するためには、眺望景観に関する記録が無視できないことを指摘した。

江戸前期の後楽園には寺院の跡地である影が濃厚に残っていたと思われ、鬱蒼とした感じは免れない。しかし、また松の葉を通して見える富士山などが後楽園の絶景として認識されており、ここには「意識的な眺望行為」が看取できる。初期の後楽園は深山幽谷の景を中心としながら、周囲の景観の眺望も重要な役割を果たしたと思う。富士の高嶺はもちろん、町の民衆の生活風景も初期後楽園の眺望景観の一つとして鑑賞の対象になったことは興味深い。頼房から光圀に至る寛永寛文時代に後楽園は完成し、綱條の元禄中はまだ旧状がよく維持されていたと思われる。しかしこの時代の後楽園にも園外の眺望行為があったとみてよい。第一の眺望スポットは小廬山であったことは文献より推定できると考える。

江戸中期以後、眺望行為が強く現れるのは既往の研究の解釈と矛盾しないが、初期後楽園に眺望景観を意識的に愛でる意図がすでにあったと見るべきだろう。しかし、初期の後楽園に「意識的な眺望行為」があったとしても、それはまだ厳密な意味での借景とは言えない。江戸中・後期の後楽園に関して、どれほど眺望の意識が働き、庭園の重要な構成要素として利用したか、さらに分析を進めたいうえで考察する必要がある。今後の課題としたい。

補注及び引用文献

- 1) 計見東山著並画(1909):後楽園 全:東京育英社
田村剛(1929):後楽園史:刀江書院
後楽園特輯(1938)7月:造園研究 第二十五輯
吉永義信(1937):小石川後楽園(名勝調査報告第三輯):文部省
吉川需(1981):小石川後楽園:郷学舎
- 2) 本中真(1994):日本古代の庭園と景観:吉川弘文館
- 3) 飛田範夫(1999):日本庭園と風景:学芸出版社, 182
- 4) 前掲書3), 188
- 5) 額賀信興(1736):後楽園記事:東京市史稿 遊園篇第一(1929):東京市役所, 129,132,144
- 6) 水戸紀年(1828):東京市史稿 遊園篇第一(1929):東京市役所, 128
- 7) 是歳——公山水ヲ好玉フ。因テ大猷公ヨリ小石川本妙寺ヲ丸ニ。吉祥寺ヲ駒籠ニ遷シテ, 其地ヲ賜テ藩邸トス。元来地勢幽邃, 喬木鬱密ソノ固有ニ據テ, 徳大寺左衛門ニ命シテ假山水ヲ草創ス。
水戸紀年(1828):重森三玲・重森完途(1974):日本庭園史大系:第18巻・江戸初期の庭(五):社会思想社, 130
- 8) 計見東山著並画(1909):後楽園 全:東京育英社, 2

- 白幡洋三郎(1997):大名庭園—江戸の饗宴:講談社, 49
- 9) 遠而近者望中千里海山之佳景朝而暮者臺上四時風雲之変態
林羅山(1640):小廬山記:林羅山文集 卷第十六(1930):弘文社, 182
 - 10) 申刻, 依豫約携信・常・勝澄・友元詣水戸邸, 謁參議君, 君動喜色, 誘余輩逍遙園中, 周回寛広, 有池有林, 池上架長橋, 橋下有舟, 喬木茂草千萬草, 拳細徑上山, 山有二堂, 其一号夷齊堂在半腹, 其一在絶頂号至徳堂, (或名達徳) 祭泰伯云云, ……其余境致暫置不言, 遠望絶景不可勝計, 既而君来, 憩池畔亭子, 招余輩探題賦詩, 又聯句再巡, (後略)
山本武夫校訂(1997):史料纂集 国史館日録 第一:統群書類従完成会, 114
 - 11) 前掲書10)
 - 12) 藤島亥治郎(1938):後楽園の建築:造園研究 第二十五輯, 25
 - 13) 吉永義信(1937):小石川後楽園(名勝調査報告第三輯):文部省, 11
 - 14) 前掲書10)
 - 15) 饗畢, 參議遊園中, 予從之, 虎林等初見此園, 園中有山有池有舟有橋, 嘉木奇巖無不備焉, 徑路迢迢如村野, 其間清水長流, 巖瀑迸出, 水車挽水回轉, 虎林曰, 如此佳境未曾見焉, 頂有堂, 号少廬山, 是應故黃門之求而先考記, 今猶存, 山下有閣, 其間有巖巖, 其路細而斜長, 參議先導, 虎林・春常・友元・伯元・正竹・伯庸及野傳等從之,
山本武夫校訂(1997):史料纂集 国史館日録 第三:統群書類従完成会, 84
 - 16) 少焉相公対面, 命郷導者令我輩遊歩後園, 過林登山, 繞池超橋, 移刻入池亭, 相公在焉, 先進膳, 而談本朝通鑑之事……
山本武夫校訂(1997):史料纂集 国史館日録 第四:統群書類従完成会, 8
 - 17) 余以異邦樗朽, 倚蒹葭於玉樹之藩。轉落英之曲逕, 經臥波之長橋。争妍競艷, 目炫心招。(中略)余覽天下之名園多矣。……斯園殆甲於天下矣
朱舜水(1669):遊後楽園賦并序:朱舜水集卷十二(1981):中華書局, 429
 - 18) 於是盤磴道, 臨幽壑。度鵲橋, 登飛閣。……豁然改觀, 意氣軒々。……重霄饗客, 下瞰千門。其為樂也融々, 豈復有加於此者哉?
前掲書17), 429
 - 19) 諸橋轍次(1960):大漢和辞典 卷二:大修館書店, 530
 - 20) 舟子艤船橋畔, 扶掖而登。睇望丹丘, 溯洄三匝, 曰:「余呉人也, 我歌子和, 戲唱呉歎以相譏可乎?」僉曰「可哉」。因為棹歌行曰:泉源恣々, 桂楫松桴, 永安流兮, 橈櫂輕採。天生民而立之君, 天生水而作之舟, 堯與禹憂勞天下, 到于今, 到于今, 載明德也悠々。」舟中之人, 撫掌大笑。遙指疊巖謂是人為。又為之歌曰:「天作高山, 人之力可以擬之。已百已千, 維其喜之。巍々其有成功, 夫誰止之?」
前掲書17), 430
 - 21) 諸橋轍次(1960):大漢和辞典 卷七:大修館書店, 1143
 - 22) 吉永義信(1937):小石川後楽園(名勝調査報告第三輯):文部省, 10
 - 23) 額賀信興(1736):後楽園記事:東京市史稿 遊園篇第一(1929):東京市役所, 133
 - 24) 吉永義信(1938):後楽園雜考:造園研究 第二十五輯, 14
 - 25) 田村剛(1938):後楽園の意匠:造園研究 第二十五輯, 3
 - 26) 太田元貞(1794):遊後楽園記:東京市史稿遊園篇第三:東京市役所, 574
 - 27) (前略)於是優遊盤桓, 尋壑徑丘;踞巖畔以憑木, 攀薛蘿而登樓。西望市塵, 往來絡繹;南仰金城, 雉堞崢嶸。指左顧右, 遊日騁懷。浩浩焉, 漂漂焉, 於乎所遊絶勝之地, 而所樂一生之尤也, 非特極耳目之娛而已
人見傳(1669):春遊小石川後楽園記:朱舜水集付録三(1981):中華書局, 770
 - 28) 清水の堂立たる山は高さ六七丈, (中略)蛇籠をも置きつづたる風景, さながら大井川嵐山の古き跡みる心ちなれや, 松の葉ごしに富士のみゆる計にて, 外には目にさはる者もなきのみや, 此御庭の絶景にして, 西山侯の御自稱なりしとか, 折節ふじの晴れてみゆれば, 富士のねを松の葉ごしに見渡せば, 三保の浦浪おもかげにたつなどと申すてたる, 御庭も今はみる事を禁ぜらるのみか, 両度まで炎上せしかば, 何事も古き世のみとはよく書たる事よ,
辻雪洞(1692):東都紀行:新燕石十種第二(1941):廣谷国書刊行會, 283